

2019年12月13日

# 「草京子」小伝

文責：浅野慎一

本稿は、畑孝氏など、数名の方々からのインタビューを主な素材として執筆した。草京子氏の人生のごく一端ではあるが、後世に伝えたいとの思いから記す。御遺族の承諾をいただき、ここに公開する。

本稿は、『草京子先生の「夢」を語る集い 資料集』(2019年12月7日)に掲載された『「草京子」小伝』に、ごく一部加筆したものである。草氏の人生の歩みの詳細については、同『資料集』に収録された44名の方々の御寄稿を参照されたい。

## 1. 生い立ち

草京子氏は1953年8月、富山県宇奈月に二人姉妹の次女として誕生した。

父は富山県五箇山で水力発電のダム管理の仕事をしていた。五箇山にはいくつかのダムがあり、草氏は父の転勤で小学校を幾度か転校した。いずれも郵便ポストもなく、「強力(ごうりき)さん」と呼ばれる人が村人から注文を聞いて町に買い出しに行くような雪深い山村の小さな小学校だったという。

転校で友達と別れるのは、父の仕事でやむを得ないとはいえ、やはり辛かった。そのせいか草氏は自分から積極的に友達をつくるというより、一人で静かに考えごとをしたり、読書をするのが好きな子供だったという。

中学校は、富山市の町はずれの大澤野中学である。筆者(浅野)は草氏に、中学時代について聞いたことがある。「田舎ののんびりした学校で、生徒も先生も仲がよく、とても良かった」と語っていた。小学校時代と違って転校もなく、穏やかで楽しい中学時代だったと思われる。また中学時代の夏休みの宿題と思われるスクラップ・ノートが、今も草氏の書棚の片隅に残っている。そこには、毎日の新聞社説が切り抜いて貼られ、詳細な用語説明と論点整理、そして自分自身の疑問や見解が丁寧な字で記されている。中学生としては並外れた社会問題への広い視野と深い関心が見て取れる。

草氏は、富山県立富山高校に進学した。県内随一の進学校だ。そして1972年3月、高校を卒業して市内の日本鋼管に就職した。ほとんどの同級生は、大学に進学した。草氏は、大学に進学する明確な目的を持たない以上、就職して働くべきと考えたようである。進学を当然とする学歴主義・学歴競争になじめず、一身をもって抵抗しようとした姿がうかがえる。後にある人への手紙の中で草氏は、「高校生活の中で、いささかはみ出した生活を送っていたとっていた私」と当時を振り返っている。

## 2. 大学時代

草氏は半年後、日本鋼管を退職し、1973年に同志社大学文学部に入学した。彼女がなぜ大学への進学を決意したのか、はっきりとはわからない。ただおそらく社会に出て働いてみて、文学と社会の諸問題をもっと深く学びたいと考えるに至ったようである。文学・読書は幼い頃から好きだった。中学時代から培った社会問題への関心も、就職して現実の社会を経験する中で一層明確になったと思われる。

草氏は大学入学後、文学や社会問題に関する複数のサークルや研究会に参加した。特に大学院生や社会人を交えた「女性史研究会」での交誼と議論は、自らの言葉、地に足のついた思想、そして生き方を模索していた草氏の人格的揺籃となった<sup>1)</sup>。心から尊敬しうる終生の友とも出会った。草氏は、そうした研究会において先頭に立って組織をリードしたり、積極的に発言するタイプではなく、「静かでおとなしく人の話をよく聞き、深く物事を考える人」と見られていた。卒業論文のテーマも、女性差別問題。当時としては先駆的なテーマだ。草氏の書棚には今も、学生時代に読んだと思われる高群逸枝や森崎和江、石牟礼道子の本が多数並んでいる。

大学時代も、草氏は少しばかり「遠回り」をした。教職免許を取るために留年し、5年間在学したのである。入学当初から教職免許を取るつもりなら、留年する必要はなかった。おそらく大学在学中、何かのきっかけで教師になりたいと考えるようになったのだろう。連れ合いの畑孝さんは、草氏に何度か教師になった理由をたずねたことがある。しかし物事を単純化するのを好まない草氏は「話すと長くなる。今は時間がないので後でね」と答え、結局は聞けないままになった。筆者（浅野）は、草氏が社会問題や思想哲学に深い造詣と関心をもっていたので、「大学卒業当時、研究者になろうとは考えなかったか」と聞いたことがある。草氏は「全然、考えなかった」と答えた。おそらく草氏は、生身の人間と直接向き合う教育という実践を通して社会問題と関わり、また国語の授業という形で文学と触れ続け、生徒に文学のすばらしさを伝えたいと考えたのではなかろうか。また自身の学校体験をふまえ、成績別に輪切りにされた高校よりも、多様な生徒と一緒に学び、穏やかで楽しかった中学校の方が自分にふさわしいと思ったのではないだろうか。

## 3. 高取台中学、本山中学、駒ヶ林中学

1978年4月、草氏は神戸市の中学教師になった。24歳だった。

しかし当時の中学の実状は、草氏が夢見ていた教師・学校像を一瞬にして打ち砕くものだった。校内暴力が吹き荒れ、またそれを押さえ込もうとする学校・教師側の強権的管理が横行していた。多数の「落ちこぼれ」の生徒を置き去りにして顧みない進学競争も蔓延していた。

最初の勤務先は、高取台中学である。当時の状況を、草氏は後にこう語っている。「その学校は赴任して数年後には、新聞に掲載されるほど校内暴力や事件が相次ぐようになりました。教師として教えるという以前に、朝起きられない生徒を起こしに行ったり、

家出をした生徒を夜遅くまで捜したりということに追われ、教えることに専念できないことにもどかしさを感じる毎日でした。赴任したてのころは『今年限りで辞めるんだ』ということを中心に毎日学校に行っているような感じでした<sup>2)</sup>。

とはいえ、そうした中でも草氏は、生徒達から信頼され、慕われていたようである。草氏は、生徒や同僚から元気で澁漑とした若い教師とみられており、「生徒から嫌なことをされた経験は、まったくなかった」と後に語っている。当時の教え子達は、卒業後も草氏が亡くなるまで集まり、訪ねてきていた。それは、草氏がたとえ生徒に厳しく接したとしても、それが単なる学校や教師の都合による管理主義的なものではなく、生徒のことを思っているものであることが、暗黙のうちに生徒にきちんと伝わっていたからであろう。

その後も、中学の危機は深刻化の一途を辿った。草氏は、1982年に本山中学、1986年に駒ヶ林中学に異動した。激化する生徒の反発、校内暴力、ますます強まる管理と競争、疲弊する同僚の教師たち。

当時、学校現場の惨状の中で心身を病み、教師を辞めようとしている若い同僚に、草氏は長い手紙を書いている。「自分のことばではないことばを生徒の前で平然と発しななければならない毎日を、あなたの体が拒否している。そう感じながら、それでももしあなたが教師を続けるつもりなら、方法はあるのだ、と私は言おうとしました。…（中略）…が、口には出せず、“辞めた方がいいのかもしれない”と私は言いました」、「（思いどおりにならない何人かの男子生徒を保健室に呼び出して）私は初めて子どもに向かってどなりました。“学校は先生が命令して生徒がそれに従う所や” 何でこんな簡単なことが今まで言えなかったのか。子どもたちはこんなに黙り込んでしまったではないか。私は快哉を叫びたいような気持ちでした。そう感じた私が、私の全てだったし、今もそれは変わりがないように思います」。そして1年余後、「あの保健室に呼び出した男の子の一人が卒業間際に書いたという作文を読ませてもらって、その中に“中学校で、勉強は山ほど教わった。でも人生のことは何ひとつ教わらなかった”という一節を見た時に味わった苦さは、彼の絶望の深さを知ったからではなく、ただ私の一人よがりな失望でしかありませんでした」。

もとより草氏は、こうした苦悩にただ押し拉がれていたわけではない。生徒を前にしたとき、今／ここで何がなしうるかをつねに考え、全力で実践する教師であった。生徒や父母からの信頼も厚かった。幼くして母を失った、ある女生徒は、草氏に亡き母の面影を見出し、壊れそうな心身を保つことができたと言った。彼女が卒業して数年後に発したSOSも草氏は見過ごさず、直ちに自宅に招いて食事をともにし、その人生後の人生に立ち会い続けた<sup>3)</sup>。そしてそれでもなお甘んじることなく、「早朝から深夜まで学校のことでかけずり回って、子どもや親から熱心な先生と言われ、自分でもそんなつもりになり、それでいてそれが『学校のため』であって、『子どものため』でなかったとは思おうともしませんでした」と自らの限界を見抜かずにいられない点に、草氏の厳しさがあった。

それゆえに草氏の心身は、限界に達しようとしていた。しかし辛うじて教職にとどまった。「毎日辞めることだけを考え、全く声の出ない授業を1カ月近く続けながら、それでも辞めずにいたのは、未だ何も見ていないのだという思いだけでした。未だ降りるわけにはいかないのだとも思いました」。

#### 4. ちびくろ保育園、ラミ中学校とその分校

そんな草氏の暗中模索に一つの希望を灯したのは、息子さんが1984年から通い始めた「ちびくろ保育園」との出会いであった。そこには、既存の学校教育の管理主義や競争主義、学歴社会を批判し、子どもたちが幸せになることのみを唯一無二の目的とし、生きる力を互いに育てあえる、新たな「もう一つの（オルタナティブな）学校」を創り出そうと模索する人々が集っていた。

草氏は、前述の若い同僚への長い手紙の中で、次のように書いている。「様々な、より自由な教育思想や方法を知り、思いもよらなかったような授業の在り方に接して、私は目をひらかれる思いでした。そのうちのなにほどこかを自分の授業に取り入れてもみました。けれど、それがどんなに豊かな内容を有していようと、その授業は私の中から生まれたものではないことを、私自身はあの時（生徒を）どなったことばから一歩も出ていないことを、そのたびに感じてきました」。「（学校を見るのではなく）子どもを見ようとするためには、私自身をもっともっと自由でありたいとしきりに思っていたのは去年のこと、今の私は目的を忘れて、自分のことに夢中です」。

「ちびくろ保育園」に集う人々は、従来の学校とはまったく異なる新たな私立中学校を設立しようとしていた。その途上、まずはフリースクールとして「ラミ中学校分校」を設立した。草氏もボランティアとして、「ラミ中学校分校」で国語の講師を担当した。

こうした活動の出会いを通して草氏は、学校や教育に完全に絶望することを免れ、かろうじて教師という職業を続けることができた。「今、私の近くで、新しい学校を創ろうという動きがあり、…（中略）…“学校は私にとっての学校がいつも始まる場所”という思いでしか、今の仕事を続けていけないと感じました」。

このように草氏は、夜間中学の教師になってから後に、昼間の中学とは異なる「もう一つの（オルタナティブな）」教育に取り組んだわけではない。もともとオルタナティブな教育家としてしか教師という職業を続けることはできないというギリギリの思いの果てに、夜間中学に飛び込んでいったのである。また草氏にとって教育とは、学校や教室の中で細分化された専門知識を生徒に供与することではない。社会や学校に排除された子供達の苦渋に満ちた人生に立ち会い、学びを通して「生きて幸せの道をさがす」力をともに身につける実践こそが教育である<sup>4)</sup>。草氏のその後の教育実践が、夜間中学の教室の内部にとどまっていなかったのは、むしろ当然であろう。

#### 5. 兵庫中学北分校（夜間中学）、鈴蘭台中学

1992年、草氏は兵庫中学北分校（夜間中学）に転任した。転任異動の募集先の一つに

兵庫中学北分校（夜間中学）を見た瞬間、草氏は「これや！」と決めたという。

赴任直後に読んだ同和地区出身女性の作文に衝撃を受けた<sup>5)</sup>。「字を読みたい、書きたいと思いつづけて四四年。はじめかいた。この（北分校での）チャンスのがしたら二どとない、がんばろう」。この激しい思いを受け止められるのか、すごく緊張したという。

福岡の炭坑町出身の50歳代半ばの男性生徒は、壮絶な人生の中で自殺未遂も経験したが、作文でこう書いた。「ここ（北分校）にはきれいなあつかいもんがあります。人の心の美しさが、分かってきた気がします。いままでの人生は真っ黒けです。今は真っ白な気がします・・・」。草氏は、学校や学問と無縁だった人が、これほど美しい言葉を語ることができることに驚き、またそれ以上に、驚いてしまった自分に愕然とした。それまで学歴や生い立ちで人を判断していないつもりだった自分自身に、ごまかしがあったと気づかされたのである。夜間中学の生徒との出会いは教師として、人間として、自らを見詰め直させてくれた。

「私たちは普段生活していて、よほどの想像力を働かせなければ、自分のすぐ身近に義務教育を終えていない人や、文字の読み書きに不自由している人がいるということには思い至らない。そういう私自身、夜間中学に来ることがなかったら、文字を知らない、苦難に満ちた、しかしながらとても豊かな世界と正面から向き合うこともなかっただろう<sup>6)</sup>。草氏は兵庫中学北分校での経験を、「授業や生徒から味わった感動を抑えられず、踊るような足取りで帰ることが、毎日毎日続きました」と後に語っている。1999年、第45回全国夜間中学校研究大会が神戸で開催され、草氏は実行委員会事務局として「主題提起」を行った。

2003年、草氏は昼間の鈴蘭台中学に異動になった。

夜間中学を11年間、経験した草氏の昼間の中学へのまなざしは、以前とは確実に変化していた。「一人一人がさまざまな事情のもとに生きている事実は、夜間中学も昼間の中学校も同じ」だと感じたのである<sup>7)</sup>。「（昼間の中学の）子ども達に向き合おうとすればするほど、声も言葉も絞り出さねば出て来ず、このまま壊れかけていくのかなあと、微かに思った時期もありました。そういう私を、本来の私へと呼び覚ましてくれたのは、この子達もまた、心や体や家庭に色んな事情を抱えながら学校に来ているのだという当たり前の事実でした。ある日、そのことにふと気付いて涙したとき、心が溶け始めました。・・・（中略）・・・夜間中学は、そして、そこで出会った人たちは、私に尽きぬエネルギーと、心柔らかく生きるすべを、こんなにも与えてくれていたのだと感じています<sup>8)</sup>。

そして草氏は、鈴蘭台中学で「世の中の普通のルールから排除されている人が一生懸命生きていることを伝えるための『人権学習』」に取り組んだ。「昼間の中学では、社会から疎外されている人の問題や、今、世界で起こっている問題に全く無関心でも、普通に学校生活が流れていくことに驚きました。無関心というのは、一番怖いことです」。昼間の学齢の「普通」の生徒達が抱える苦難は、多様な年齢・国籍・出自の夜間中学生

のそれと深いところでつながっている。他者の苦難への無関心は、自分の苦難から目を背けることにもつながっている。「見えないところのものをきちんと見るまなざし、そのまなざしをこの社会が持ち続けているかどうか、（夜間中学）北分校の生徒達は、厳しさと暖かさを込めて問うているように思う」<sup>9)</sup>。

## 6. 丸山中学西野分校（夜間中学）と全夜中研

そうした中で、兵庫中学北分校（夜間中学）時代の教え子や卒業生、フリースクールや在日外国人の関係者が「草先生を夜間中学に戻してほしい」と嘆願する運動に立ち上がった。新聞もこれを大きく報道した。教育委員会との交渉の場で、生徒や卒業生達は「草先生は、私らのように文字を知らない人間のよりどころだ」、「北分校の明かりを見ると元気になる。そこに草先生がいると思うともっと元気になる」、「（草先生は阪神淡路大震災のとき）韓国の人であれ、ベトナムの人であれ、日本の人であれ、みんなのところを自転車で走り回って、生きていれば何とかなると、そういう場を与えてくれた」と口々に訴えた<sup>10)</sup>。運動の意義として、「草先生は夜間中学にたどり着いた一人ひとりの背負った人生の重さを受けとめることができた先生であった。草先生は夜間中学の生徒たちが奪われていた文字を取り戻し、人間として復権していくために、いつも寄り添い、励まし続けてきた。だからこそ、夜間中学になくてはならない人である」ことが確認された<sup>11)</sup>。

草氏自身は、異動の是非について一切語らなかった。「いま受け持っている生徒もいるから」だ。ただ嘆願に立ち上がってくれた生徒達の声を、このように受けとめた。「学びへの渴望感が初めて出会った私への思いと重なって、響いているのでしょうか。こんなに強烈な出会いに恵まれて、こんなに幸福な教師っているかな、と思う」<sup>12)</sup>。

こうして草氏は2006年、丸山中学校西野分校（夜間中学）に再び異動することとなった。

草氏は、休みがちな夜間中学の生徒の自宅や職場をしばしば訪問した。休みがちになる理由、また生徒が抱える様々な苦難や不安は、教室での普通の授業の中だけでは到底把握・共有することができない。また何より、暮らしぶりと学びへの意欲は背中合わせだからだ<sup>13)</sup>。そして草氏は、生徒のその場しのぎの嘘や言いわけを決して聞き流すことなく、本気になって叱り、励ました。夜間中学の生徒にとって草氏は「とんでもなく優しく、だからこそとんでもなく怖い先生」だったようである。西野分校のある生徒は、卒業後の将来の生き方にまで思いを馳せた手紙を在学中に草氏からもらった。彼女はこの手紙を終生の「宝物」として今も日本語の勉強を続け、「人の役に立ちたい」と通訳のボランティアにも取り組んでいる<sup>14)</sup>。

2009年、第55回全国夜間中学校研究会大会が神戸で開催され、草氏は再び大会事務局として大会を成功させた。大会開催の抱負を、「学ぶ権利から遠ざけられた人たちに安心して学ぶ場所があることを伝えたい。多くの人と学ぶ喜びを見詰め直し、いまの社会の仕組みや学校の在り方がますます夜間中学を必要とする人を生み出している認識を共

有する場にしたい」と語っている<sup>15)</sup>。

また草氏は、日本で最初に公立夜間中学が生まれた兵庫県内の夜間中学に関する歴史資料を収集するため、県内各地を回り、資料集を編集した。これは特定地域の夜間中学の歴史研究として兵庫県では初めて、関西でも1971年の白井重行氏による大阪府調査以来の貴重な成果である。「(1940～70年代の埋もれかけた夜間中学の歴史に)光を当てたい。地道に取り組んできた先生らの証言や資料を4～5年かけて集めた。60年の歴史の中にいま抱えている課題があり、解決の糸口や進むべき道を教えてくれる」と語っている<sup>16)</sup>。

さらに草氏は、全国夜間中学校研究会大会の講演者とともに近畿地方の夜間中学の生徒(747名)の生活実態調査にも取り組んだ。2011年、大阪で開催された第57回全国夜間中学校研究会大会では、全国の生徒(1150名・11カ国語)の生活実態調査を実施したが、こうした全国規模の生徒実態調査も1960年代以来のことであった。

そして2012年、草氏は全国夜間中学校研究会事務局長、また2013年には副会長に就任し、全国各地の多くの関係者とともに、すべての人に義務教育を保障し、夜間中学を法制化する運動を推進した。

2013年には、夜間中学史料収集・保存ワーキング・グループを立ち上げ、本格的に史料収集・保存の事業にも取り組んだ。

これらの組織的活動とは別に、草氏の夜間中学での教育の本領は、目の前にいる一人ひとりの生徒の人生に立ち会うこと、今／ここで自分自身が相手に対して何ができるかを最大限に考え、それをひたすら実践することにあつた。「夜間中学は、教育から疎外されてきた人たちが、今まで生きてきたことを見詰め直し、これからの人生を皆とともに幸せに生きるために学びあう場です」<sup>17)</sup>。様々な組織活動での多忙を口実に、目の前にいる生徒をほんのわずかでもないがしろすることは、草氏にとっては本末転倒である。当然、多忙を極め、身体がいくつあっても足りなかった。仕事は深夜から早朝に及ぶことも少なくなかった。

そしてこのような、目の前にいる一人ひとりの生徒に寄り添い、しかも教室の中だけでなくトータルな人生・生活の歩みの中で学びの意味を問い直そうとする姿勢は、もとより草氏の全人格から発したものではある。しかし同時にそれは、作文を軸にした草氏の国語教育法によって一層確固たるものになったと考えられる。作文に表現される生徒の人生や思いは、一人ひとり異なり、かけがえがなく、しかも重い。「学問や学校に無縁であったのに、ではなく、無縁であったからこそ、心の中に体の中に美しい言葉を積もらせたきた。それが、今、夜間中学に来て、文字を得ていっぱいにあふれ出してきている。私たち夜間中学の教師にできることは、あふれ出した言葉をたんねんに拾い上げ光を当てることではないのか」<sup>18)</sup>。草氏は、社会から疎外・排除されてきた人々の「心から言葉が誕生する瞬間」<sup>19)</sup>に魅せられたのである。草氏が、生徒を一塊の集団と捉えず、一人ひとりのかけがえのない人間と捉えたのは、当然であろう。

草氏は、2014年、60歳で丸山中学校西野分校（夜間中学）を定年退職した。36年間の教師生活、うち19年間は夜間中学の教師であった。

## 7. 地域社会での諸活動

前述のように、草氏にとって教育とは本来、地域や社会に開かれたものでなければならなかった。

当然、草氏は退職以前から、極めて多彩な社会活動に参加していた。

連れ合いの畑氏の知る限りでも、部落解放・ハンセン病患者・水俣病患者・野宿者等の支援集会に参加していた。

1992年、兵庫中学北分校(夜間中学)赴任直後から、生徒の卒業後の進路の一つである定時制高校の関係者との連携に踏み出した。1994年には生徒にベトナム難民がいたことから、ベトナム語講座を受講し、地域に多数居住する在日ベトナム人の日本語支援活動も開始した。こうした日本語支援はその後、ブラジル人・中国人・韓国朝鮮人、そして中国帰国者(残留孤児やその家族)等の支援者とも連携する中で、兵庫日本語ボランティアネットワークの活動へと発展していった。

1995年の阪神・淡路大震災の際、草氏は生徒の安否確認・支援活動のために自転車で被災地を走り回り、生徒以外の多様な困窮者の支援活動にも奔走した。1996年には神戸市東灘区で地域の非識字者や夜間中学の卒業生のための識字教室「大空」を開設した。そして2006年、夜間中学や在日コリアン、被差別部落、障害者、ベトナム難民、不登校者、識字教室、日本語教室、フリースクール、定時制・通信制の高校等の関係者を幅広く結集し、「神戸の『夜間中学』と『教育』を考える会」を結成した。

2004年から中国残留孤児の国家賠償訴訟の支援活動にも参加し、2006年、神戸地裁での勝訴判決を受けて結成された「中国残留孤児を支援する兵庫の会」では世話人を務めた。残留孤児自身が自らの人生を語る朗読劇（「私たち何人ですか」）の脚本・演出など、草氏にしかできない役割を果たした。ここでもまた組織活動だけでなく、一人ひとりの残留孤児と向き合い、その人生を掘り下げて深く理解し、そして今／ここで自身ができることを精一杯なしとげようとする姿勢を貫いていた。

夜間中学を退職した後も、草氏は夜間中学法制化の運動を熱心に続け、仲間とともに、2016年にはついに教育機会確保法の成立にこぎつけた。

神戸大学にも毎週1～2回通い続け、全国の夜間中学の歴史的資料の収集・保存の事業を飛躍的に前進させた。

看護学校への進学を願う在日ベトナム人の女性に勉強を教え、彼女に合いそうな看護学校をあちこち探し、一緒に岡山県高梁市まで行って相手方の先生と相談してきた。そして彼女は見事合格し、今は神戸市で看護師として働いている。

## 8. 限りある生と未来への思い

2016年11月、草氏に癌が見つかった。

根治を目指す努力を最後まで続けるとともに、人は誰も皆、限りある人生を生きる事実を改めて実感し、今／ここで何をなすべきかを一層深く考えた。

草氏が出した答えは、大きく二つだったように思われる。

一つは、これまで続けてきた様々な社会的実践を、最後までまっとうし、発展させることである。

2018年、「ひょうご夜間中学をひろげる会」を結成し、会長として兵庫県での増設運動に取り組んだ。既に病状は進み、身体はかなりきつかったが、それを押しして夜間中学の新設が求められている県内各地を訪れた。法制化がようやく実現した今、「これから夜間中学校がどのようになっていくのか、この目で見届けたい」と語っていた。

夜間中学の歴史資料の収集・保存事業のために神戸大学に毎週1～2回通うことも続けた。夜間中学の歴史に関する論文も執筆・刊行した。「夜間中学史料保存委員会」のメーリング・リストには、亡くなる3カ月前の2018年10月まで投稿を続けた。その内容は文面だけを見れば、絶えず襲い来る身体の辛さを一切感じさせない、前向きな情報提供・問題提起・意見表明ばかりであった。

周囲が何と言おうと、草氏はそれらの活動をやめようとしなかった。「人は誰しも限られた生を生きる。だからこそ、今／ここでなすべきことがある」、「いつ倒れても悔いがないと思えるほどに人生を豊かにする。そのために、今／ここでできることをする」。いずれも晩年の草氏の言葉である。2018年12月にホスピスに入院する直前まで、草氏は様々な活動を続けた。亡くなる約1カ月前、ホスピスで「夜間中学のことを考えると少し落ち着く」と消え入るような声で語っていた。

草氏は、言葉として「自分の行ってきたことを引き継いでほしい」といったことは、おそらく誰に対しても言わなかったのではないかと推察される。少なくとも筆者(浅野)には言わなかった。それは、一方で草氏が一人ひとりの思いを尊重し、自分のそれを他人に押し付ける人ではなかったからだ。そして他方で、草氏がつねに仲間とともに歩み、何も言わなくとも草氏の実践や思いを受け継ぎ、さらに発展させようとする、まだ見ぬ人々も含めた仲間が必ず出てくるという歴史と未来への信頼からである。

病床から草氏は、大学時代以来の尊敬する年長の友に、手紙を書き送っている。「六十年を生きてきて、自分がいかに見栄っぱりで、どうしようもなく心が狭いか、また、自分で言いもし人にも言われるほどには信念を通して歩いてきたわけではないことを、いやというほど知っています」、「にもかかわらず、わずかに一すじだけは、まっすぐで透明なものを失わずに生きてこられたと思えます」<sup>20)</sup>。

草氏が大切にしたもう一つは、家族と時間を共有することだった。草氏はこちらの面でも最後までアクティブであった。

ホスピスの病室で草氏は、自分の葬儀についても連れ合いの畑氏と話し合った。そして「どんな形にするかいろいろ考えたけれど、思いきりたくさんの人に来てもらえる葬儀にしたい」と、自分の人生に最もふさわしい最高の結論を出した。

草京子氏は2019年1月19日午前1時55分、逝去した。65年の人生であった。

《注》

- 1) 2019年12月7日「草京子先生の『夢』を語る集い」当日配布資料より。
- 2) 草京子「より多くの人に新しい人生を」『学ぶ権利を取り戻すために 資料集』。  
以下、いずれも一部に筆者による要約・変更あり。
- 3) 2019年12月7日「草京子先生の『夢』を語る集い」でのスピーチより。
- 4) 「神戸の『夜間中学』と『教育』を考える会（仮称） 呼びかけ文」より。
- 5) 『神戸新聞』2009年11月23日、『毎日新聞』2003年11月28日、草京子「しあわせのみちをさがす学校」『ひょうごの人権教育』167、草京子「夜間中学が問いかけるもの」『えんぴつ』第26号、草京子「『夜間中学』を想う」『ひょうご部落解放』6号など。
- 6) 草京子「『夜間中学』を想う」『ひょうご部落解放』6号、草京子「夜間中学生が問いかけるもの」『人権・同和教育ひょうご』119号、同『えんぴつ』第26号など。
- 7) 『毎日新聞』2003年11月28日。
- 8) 草京子「『夜間中学』を想う」『ひょうご部落解放』6号。
- 9) 草京子「夜間中学生が問いかけるもの」『人権・同和教育ひょうご』119号など。
- 10) 『神戸新聞』2006年4月6日、『草先生を夜間中学へ戻してください』。
- 11) 「草先生を励ます会」資料。
- 12) 『朝日新聞』2003年10月22日。
- 13) 『朝日新聞』2003年10月22日。
- 14) 2019年12月7日「草京子先生の『夢』を語る集い」でのスピーチより。
- 15) 『神戸新聞』2009年11月23日。
- 16) 『神戸新聞』2009年11月23日。
- 17) 「神戸の『夜間中学』と『教育』を考える会（仮称） 呼びかけ文」。
- 18) 草京子「『夜間中学』を想う」『ひょうご部落解放』6号、草京子「夜間中学が問いかけるもの」『えんぴつ』第26号。
- 19) 『朝日新聞』2004年8月3日など。
- 20) 2019年12月7日「草京子先生の『夢』を語る集い」当日配布資料より。

追記的エピソード1.

2018年12月23日、筆者（浅野）がホスピスにお見舞いに行くと、草氏は筆者が好きな中島みゆきのCDを病室に流して迎えてくださった。またその翌日、ホスピスの聖歌隊が草氏の病室で賛美歌を歌った。草氏は、畑氏の助けなしには身体も動かさない状態であるにもかかわらず、ベッドに一人で端然と座り、賛美歌にじっと聞き入り、それが終わると拍手をした。最後まで、目の前にいる人のために、自分が今／ここで何ができるかを誠実に考え、それを実行に移す人であった。

追記的エピソード2.

草氏は、茨木のり子の詩が好きだった。どの詩が好きだったかは、わからない。ただ、草氏を彷彿とさせる詩の断片を記しておく。

学校 あの不思議な場所（抄）

“ぼくたちよりずっと若いひと達が  
なにに妨げられることもなく  
すきな勉強をできるのはいいなァ  
ほんとにいいなァ”

満天の星を眺めながら  
脈絡もなくおない年の友人がふっと呟く

学校 あの不思議な場所

校門をくぐりながら蛇蝎のごとく嫌ったところ  
飛びたつと  
森のようになつかしいところ  
今日もあまたの小さな森で  
水仙のような友情が生まれたり匂ったりしているだろう  
新しい葡萄酒のように  
なにかがごちゃまぜに発酵したりしているだろう  
飛びたつ者たち  
自由の小鳥になれ  
自由の猛禽になれ

付録1 「草さんなら、どうするだろう」

浅野慎一(神戸大学)

『草京子先生の「夢」を語る集い 資料集』(2019年12月7日)、「草京子さんとともに生きた日々」より。

草さんと私のかかわりは、中国残留日本人孤児の支援活動から始まった。実はそれ以前、私が指導する大学院生が識字教育について論文を書き、草さんに大変お世話になった。彼は研究室で、草さんの魅力を熱く語っていた。しかし当時、私は草さんに御礼も挨拶もせず、その御名前しか存じ上げていなかった。

その後、中国残留孤児の支援活動の中で初めてお話をさせていただいたが、その草さん

が、以前に私の指導院生がお世話になった草さんだと気づいたのは、ずっと後のことだ。迂闊なことである。草さんは、残留孤児たちの朗読劇の脚本・演出を担当され、残留孤児の歴史的背景や政策の変遷について、私の研究室に度々、質問に来られた。その際、一人ひとりの孤児の生活史や体験・悩みについて、とても深く聞き取りをしている様子がかがえた。

その後、草さんが私を夜間中学の世界に「引きずり込む」ことで、関係は一挙に深まった。夜間中学に関する仕事(全国夜間中学校研究会大会での講演)を依頼された当初、私は即座に辞退したいと答えた。辞退の理由は二つあった。一つは、残留孤児関係の仕事で手一杯で、とても夜間中学の勉強を新たに始める余裕がない。もう一つのもっと本質的な理由は、私が学校、特に中学とその教師にトラウマともいえるべき嫌悪感を抱いており、そこには近づきたくない。すると草さんは穏やかに優しい声と口調で、しかし内容的には厳しく反論した。一つは、浅野は「残留孤児の人生の歩みや生活の現状をトータルに把握しなければならぬ」と言っているくせに、残留孤児の人生に大きな意味をもつ夜間中学を避けて通るのか。もう一つは、浅野が中学やその教師に徹底した嫌悪感を抱いていることは以前から聞いて知っており、そんな浅野だからこそ、忌憚のない本音の話が聞けると思い、大会講演を依頼したのだ。

こうして私は夜間中学の世界に引きずり込まれた。今は、引きずり込んでくれた草さんに、心から感謝している。その後、草さんとの共同の仕事は、①夜間中学生の生活実態調査、②夜間中学の歴史的史料の収集・保存事業、③夜間中学に関する学術論文の執筆(共著)など、多岐にわたる。①の生活実態調査の分析結果は一応、私(浅野)の個人名で発表されている。内容に関しては、私が全責任を負う。しかし、この調査は、草さんがいなければ実現しなかったことは明らかな(もとより近畿夜間中学校連絡協議会・全国夜間中学校研究会の全面協力をいただいたことも、いうまでもない)。

特に2009年以降、草さんは週に1~2日位のペースで私の研究室を訪れ、様々な仕事を一緒にしてきた。私にはあっという間に感じられるが、10年以上もの歳月、共同でいろんな仕事をしてきたわけだ。草さんの病状が深刻になり、研究室に来られなくなった後は、御自宅や時には病院の病室にまでお邪魔して、仕事の打ち合わせをしたり、文学・詩や教育、そして死生観などについても語り合った。

しかしそれにもかかわらず、草さんが亡くなった後、私は草さんについてほとんど何も知らなかったことに気づいた。草さんの小伝を書くためにいろんな人の話を聞き、関連資料を読んでみて、ますます自分が草さんについて何も知らなかったとの思いを深くした。もっと早く、そして深く、草さんのことを知っていれば、一緒に共同してもっと有意義な仕事ができただろうと思う。今となっては悔まれるばかりだ。草さんにあと10年の時間があれば、兵庫県のマイノリティ教育はまったく違ったものになったであろうことを、私は今は断言できる。しかし同時に草さんが、その人生において為すべきことをすべて成し遂げて逝ったこともまた断言できる。

私が草さんから学んだことは数えきれない。それはここに到底書ききれない。

ただ、①社会から疎外された人々の立場に立つこと、②幸福を求めて懸命に生きる一人ひとりの人間の成長・発達を何より重視すること、そして③自分のことは勘定に入れず行動すること。この3点は、私が草さんから学んだ最低限守るべき鉄則だ。私は草さんほど強くも賢くもないので、その鉄則をしばしば忘れてしまう。今後、自分の生き方・進み方に迷う時があったら、必ず「草さんなら、どうするだろう」と考えることにしよう。

## 付録2 『草京子先生の「夢」を語る集い』（2019年12月7日）リレートーク

浅野慎一(神戸大学)

草さんとは、中国残留孤児の支援、夜間中学生の生活実態調査、そして夜間中学の歴史資料の保存などの活動で一緒にさせていただきました。それらの活動について語り出すと、とても時間が足りませんので、配布された資料集をご参照ください。

草さんは、2009年頃から約10年間、週に1～2回、私の研究室に来て、夜間中学の歴史資料の保存や分析の作業をしていました。病が重くなり、研究室に来るのが難しくなると、私の方が草さんの御自宅に招かれ、時には病院の病室にまでお邪魔して、作業を続けました。その意味で私は、ご家族以外では、草さんの最も晩年にたまたまではありますが、比較的頻繁にお会いし、語り合う機会が多かった立場にあると思います。そこでここでは、草さんの晩年の姿から私自身が学んだこと、教えられたことの一部を、お話しさせていただきます。

私が草さんから学んだのは、まず第1に、社会から疎外された人々の立場に徹底して立ち、自分のことは勘定に入れずに行動することです。草さんが自分の損得のために怒ったところを、私は一度も見たことがありません。でも夜間中学生や残留孤児、マイノリティの人々を疎外する人や組織に対しては、亡くなる3～4カ月前まで、憤りを露わにする場面を何回か見ました。

第2は、社会から疎外された人々を、助けてあげるべき対象ととらえるのではなく、幸せになることを求めて自ら学び、成長・発達する主体的な人間と捉え、しかもそのような人々こそが歴史や社会を本当の意味で作り上げていくのだという見方です。だからこそ草さんは、そうした人達の人生に立ち会うことが心底楽しかったのだと思います。

第3は、人は誰も限られた人生を生き、だからこそ今／ここで為すべきことを為せばよいということです。病気が見つかった後、草さんはもちろん大きな不安を抱えていました。それでも不安に押し潰されず、最後まで凛々しく生きられたのは、草さんがその人生において為すべきことをきちんと為し、それが本当に価値あるものなら、必ず誰かがそれを受け継いでいくという確信をもっていたからだだと思います。そのようなことを、晩年の草さんと話し合ったことがあります。

そして第4は、目の前にいる人のために、今／ここで自分が何ができるのかを精一杯考えるということです。2018年12月23日の夜、ホスピスにいた草さんから消え入るような声で「夜間中学のことを考えると、少し落ち着く」と、私の研究室に電話がありました。私はすぐに草さんの思いが特に詰まっていると思われる夜間中学の資料を何点か持って病室に向かいました。すると草さんは、私が好きな中島みゆきのCDを病室に流し、私を迎えてくれました。すでにお連れあいの畑さんの助けなしには体も動かせない状態でしたが、それでも最後まで、目の前にいる人のために今／ここで何ができるかを考え、実行に移す人だと感じました。

私が草さんから学んだことは、ほかにもたくさんあり、この場で言い尽くせません。ただ、心から尊敬できる友・畏友と呼べる人ができたことは、私の人生にとって大きな喜びです。